

銅賞

文学部 現代社会学科 4 年

桑原沙也加さん

『流れ星が消えないうちに』／橋本紡著／新潮社

大切な人が突然、「星になった」ら。

誰とだって、いつかは別れる。

それは、言葉通りの関係がきれいな別れだけではなくて、運命というか、生き物である以上避けられない「死」が誰にでも訪れる可能性があるから。

奈緒子は、最愛の人「加地くん」を遠い異国の地で亡くした。

大切な人を突然失っても、その人の言葉や考え方、記憶は決して消えてはいかない。

たくさんの愛おしい記憶を、幾度となく反芻することは、「今」を生きている私たちが先へ進むための大切なプロセスなのかもしれない。

星を眺める時、もう会えない人のことを思い出してしまう。

何年経っても星は確かにそこにあって、私たちが静かに見守ってくれている。

たいせつな人に思いを馳せながら、ゆっくり読んで欲しい、そんな本です。

そして、読み終わった後には夜空を眺め、伝えられる限りの想いを伝えてほしい。

同じ場所に留まっていられるのは、長い人生の中のごくごく僅かな時間しかないのだから。